

平成二十五年八月十日発行
皇學館論叢第四十六卷第四号
抜刷

紹介

阿部邦男氏著 『蒲生君平の『山陵志』撰述の意義

—「前方後円」墳の名付け親の山陵研究の実態—

松 本 丘

阿部邦男氏著 『蒲生君平の『山陵志』撰述の意義

—「前方後円」墳の名付け親の山陵研究の実態—

松 本 丘

本書は、著者が長年に亙る研究成果を纏め、皇學館大学より博士号を授与された学位論文を上梓せられたものである。本文五四八頁、参考資料等二七二頁、計八百頁を超える浩瀚の著であつて、中学校の教壇に立つ傍ら、各地の史資料を博捜せられた著者の労苦に、先づ以て敬意を表する次第である。以下、その内容を紹介しつつ、若干の所感を記してみたい。

○

本文は、三編より成つてをり、第一編「元禄期・享保期の山陵論—松下見林の研究・幕府による山陵修補事業—」では、蒲生君平の山陵論へ至る前提として、見林の山陵論と、元禄・享保の山陵修補について論ぜられる。

先づ第一部「松下見林著『前王廟陵記』成立をめぐる」には、近世に於ける山陵研究の先駆的著作である『前王廟陵記』の撰述は、徳川光圀の山陵修補への志と密接に関連し、光圀の实子であり、封内の崇徳天皇陵修補を行つた高松藩主松平頼常の要請によるものであること、また同書が『山陵志』を始めとする後世の山陵研究に与へた影響の大きさが述べられる。

第二部「幕府による元禄度の山陵修補事業」にては、柳沢吉保の主導に係る元禄度の山陵修補事業について、修補に至る経緯、参考とされた資料、実際に修補を監督した京都所司代松平信庸の活動が詳しく考察されてゐる。

第三部「幕府による享保度の山陵修補事業」では、享保度の山陵修補の實際が、『享保山陵記』等の新史料を用ゐて概観さ

れてをり、幕府による両度の山陵修補は、北朝を正統とする幕府の歴史観を示すとの指摘もなされてゐる。

江戸前中期の山陵修補事業を総括的に論ずる本編では、個々の事業の連関や背景が明らかにされ、君平の時代までの山陵観の沿革が的確に捉へられてゐる。

○

次に、第二編「寛政期・文化期の山陵論 蒲生君平著『山陵志』の撰述をめぐる」は、『山陵志』をめぐる諸問題を扱った本書の中核部分である。

第一部「山陵研究家の存在と蒲生君平 同志の協力の実際」に於いては、本居宣長を始めとして、竹口榮齋・堤広庵・覚峰・若槻幾斎・小澤蘆庵・畠中頼母・泰深といった諸家が、君平の山陵調査に対して如何に協力し、如何なる示唆を与へたのかが詳細に綴られてゐる。

第二部「蒲生君平の山陵探索を目的とする西遊」は、両度に互る君平の西遊について、これまで未確定であつたその時期や、水戸藩の高野子隠、讃岐の牧石潭による協力の実際を明らかにする。

第三部「『山陵志』の成立をめぐる」では、君平の山陵に対する関心が、高山彦九郎との交流を通じて強められたことを

指摘し、『山陵志』撰述の目的は、当初水戸藩の『大日本史』志類への編入であつたが、同志類の一時編纂中止といふ事情により、水戸藩或いは幕府による山陵修補が実現した際の参考資料作成へと変化していつたと論ずる。そして、君平の山陵観と、多くの資料に基づいた君平の実証的な姿勢とその成果、さらに、『山陵志』稿本の幕府儒員柴野栗山への呈上や、同書天覧について考証されてゐる。

第四部「幕罪略」についての「考察」では、『山陵志』の完成と出版、『山陵志』発行後の幕府の君平喚問について述べると共に、君平を撰者に擬する説もある『幕罪略』（朝廷に対する幕府の罪を二十一箇条に互つて記した書）の内容を分析し、君平幕府観との相違から、彼の手になつたものではないことを確認してゐる。

この第二編に於いては、君平の西遊について、第一次が寛政八年末から翌九年秋にかけて、第二次が寛政十二年春から夏にかけてと、その時期が確認され、その間の足跡も明らかになつたことは、君平の伝記研究を大いに進めたものと評価されよう。

一方、本居宣長等の同志より君平への影響や、『山陵志』撰述の目的を論ずる箇所では、論拠として挙げられてゐる資料が、いはば状況証拠に止まり、多くは推定の域を出でてゐない

やうに思はれるため、さらに綿密な裏付けが求められる。

○

第三編「天保期・文久期・慶応期の山陵論―徳川斉昭・宇都宮藩による山陵修補事業の建白・実施―」は、『山陵志』が与へた影響の例として、徳川斉昭の建白と、宇都宮藩による山陵修補とを取り上げてゐる。

第一部「徳川斉昭の山陵修補事業の建白とその意義」では、三次に及ぶ斉昭の建白の背景として、義公光圀の遺志継承があつたこと、そして『山陵志』の成立がその動機となつたことを論じてゐる。

第二部「宇都宮藩による山陵修補事業」にては、藩主戸田家歴代が好学・尊王の風を伝へてゐたこと、修補を提議した同家重臣の梶信輯（号六石）の学問、山陵奉行として修補を指揮した戸田忠至の至誠、事業の実際と山陵研究家との関係等について説かれ、君平が『山陵志』に込めた志は、この文久年間の修補によつて達成されたものとされる。

そして最後に、君平の『山陵志』を筆頭とする山陵論の流れが、彼の出身地でもある宇都宮藩の山陵修補の実施と完成を通して、明治維新に大きな影響を与へたと結論する。

天保から幕末にかけての山陵をめぐる動き、特に宇都宮藩の

阿部邦男氏著『蒲生君平の『山陵志』撰述の意義（松本）

修補事業について、その実情と背景が詳細に跡付けられてをり、近代の神祇行政への影響も指摘されてゐる点も高く評価できよう。

なほ、本文に続いては、「参考史料」として本文に関係の深い諸史料、「参考表」として、諸山陵一覧・山陵御修補事業の経過・陵墓関連年表・『書陵部紀要』にみる陵墓関係調査概要が附されてをり、有益である。

○

本書により、戦後は殆んど顧みられることのなかつた蒲生君平の事蹟について、かくも詳細なる研究成果が得られたことは、洵に慶賀に堪へない。一方、本書の中心課題といふべき『山陵志』の意義に関しては、やや嫌らぬ点が無いではない。君平は自身にて、

竊かに山陵志を稿す。即ち是れ臣の伏苓なり。未だ自ら其の国を医するの剂に供するに足らざるを知らず。然れども民、追孝を其の父祖の墳墓に尽さんと欲せば、必ず天子の祀典を修復するより始む。故に敢へて之を献ずと云ふ。（『不恤緯』治要第一）

と、述べてゐる。すなはち彼は『山陵志』を国家振起の薬料にせんとの大志を持つてをり、山陵の復興は、国民一般に於ける

崇祖の風振起の基に位置付けられてゐた。そして、その精神的
団結を以て外寇に当らんとするのが君平の描く経緯であつた。
著者の恩師・荒川久壽男教授も『宇内の大理』（四海書房、昭
和十九年）にて指摘されてゐる如く、この君平の思想は会澤正
志斎の『新論』へと受け継がれてゆくのである。その意味で、
君平が明治維新に与へた影響はさらに大きいものであるとい
へ、本書が説くやうに、『山陵志』が修補事業の参考資料として
編まれたといふ点は確かにその通りであらうが、これのみにて
は君平の学問思想の全体像を見失ふ虞れがあらう。今後、著者
には君平の思想面をさらに掘り下げる研究を期待したいと思ふ。

○

本年は宛も蒲生君平歿後二百年にあたつてをり、その記念事
業も企図せられてゐる由である。著者もこれに猷身的に携はら
れてゐるが、これを機に君平の功績が改めて顕彰されることを
願ふと共に、本書がその確乎たる基礎となることを信じて筆を
擱く。

（まつもと・たかし 皇學館大学教授）